24　サロモン氏産科鉗子

石原　力

昨年第九五回総会でライデンのSalomonの伝記について口演したが、今回ライデン大学ボイケルス医史学教授の御好意によりサロモン鉗子のスライドを頂いたので、実物の鉗子と、原著『産科学手引書』（二版一八二六）の図と、矢田部卿雲訳『撒氏産論』（一八四五）の図とを比較し、当時の状況におけるこの鉗子とその意義について考察したい。

産科荅焉屈（鉗子）について『撒氏産論』は、巻五「施術篇」の中で八三頁を費して詳述している。サロモン自身は、一七二〇年頃発明された巴膚歇猗焉Palfyn鉗子は不十分なもので、その後勒敷呼多Levretと斯墨膚礼夜Smellieが鉗子に骨盤軸に沿う骨盤弯曲をつけたことで完全なものとなり、この二つの鉗子に勝るものはないと述べている。その上でサロモンは、基本であるルヴレー鉗子の匙の窓縁にある隆起は児の頭皮損傷防止のために取り除き、管鑰（接合部）は蒲律尼焉噶烏設焉Brüninghausen鉗子の簡単なものを採り、柄は術者の腕を挟みがちな末端の鉤状部分を取り去った矢夜暴膚独Siebold鉗子から採って新型鉗子を作ったが、これら両鉗子の骨盤弯曲は強過ぎ、後から入れる右葉挿入時に、前に入れてある左葉が転回しやすいため弯曲を少くした。矢田部は原著の図には記載がないのに鉗子の長さを一尺四寸と書き、各部の長さも示した½の縮小図を掲げ、製作しようとする者の便を計っている。

サロモン鉗子は新機軸のものではなく、部分改良型鉗子のためか、ブリュンニングハウゼンやシーボルト鉗子も同じく、鉗子文献に記述を見ないようである。なおシーボルト鉗子は、考案者ベルリン大学産科教授Adam Elias von Sieboldの甥のPhilipp Franz von Sieboldにより一八二三年日本へもたらされ、娘のいねから数人を経て長崎県立博物館に所蔵されている。門人への示説はあったと考えられるが、普及の形跡はない。

一方、書物による鉗子の紹介としては、一七六八(明和五)年山辺篤雅の自序のある『産育編』末尾に、一七九八(寛政一〇)年の日付けのある暗厄利亜(アンゲリア)(英国)の「偏・双鉸(こう)」図が付加されている。これは初期の英国型長鉗子と思われる。また一七九五(寛政七)年の自序がありながら一八二二(文政五)年に公刊された片倉元周の『産科発蒙』に英機黎(エゲレス)国産科書所載の「奇器」使用図が二つあり、智巧の士に製造を勧めているが、これはスメリー著『解剖図譜』(一七五四)所載のスメリー弯曲短鉗子である。これらは産科鉗子の製作と使用につき啓蒙する意義があった。

一九世紀に入ってからの本格的産科翻訳書としては、訶倫(ホールン) van Hoorn 原著(一六九七)・華弗(ハーフ) ten Haaf 蘭訳『助産術教育』(一七六八)の青地林宗訳『訶倫産科書』(一八二三)や、抜烏挺碌却(バウデロククエ) Baudelocque 原著『産科原理』(三版一八〇六)・C.S.蘭訳『産科基礎』(一八〇八)の足立長雋訳『産科礎』があるが、両書とも助産婦用のせいか、鉗子についての説明はなく、後著に「丹(タン)(単)掘(グ)」の語だけがみられる。モンペリエ大学産科教授儒傑(ヂュゲス)氏 Dugès 原著『産科学マニュアル』(一八二六)・無名氏蘭訳『産科学ハンドブック』(一八二八)の箕作阮甫訳『産科簡明』(一八四四)には附図に「匙(し)鉗」使用六図があり、ボードロック鉗子であるが、それの説明はほとんどない。なお江戸時代の鉗子試作者には、奥沢軒中(出頭械)、難波抱節(牡牝(ぼひん)子)、深見友賢、物部京蔵、長柄春竜等が知られている。

以上のような状況で、『撒氏産論』の鉗子論は他に類がなく、歴史、構造、用法、目的、適応、要約(条件)、禁忌等に及ぶ学問的水準の高いものであり、本書は優れた翻訳と相俟って江戸時代最高の産科学書と言うことができよう。本書に従って行われた本邦最初の帝王切開の成功(一八五二)がこれを裏書きする。維新開国が遅かったなら、サロモン鉗子、その改変鉗子が、この国で大きな役割を演じたであろうことは疑いない。

(賛育会病院助産婦学校)